

# 葡萄ハゼの復活へ向けて ～研究と普及の連携～

## ■生きていた!?「葡萄ハゼ」の原木

葡萄ハゼは今から約190年前に紀美野町で発見され、大きな実が葡萄の房のように実ることから「葡萄ハゼ」と命名され、蠟の含有率が高く、木蠟の品質も良いことから全国的にも有名な優良品種ハゼとなりました。



図1 葡萄ハゼの原木

最盛期には約30万本の葡萄ハゼが県内各地に植栽され地場産業を支えましたが、和蠟燭が西洋蠟燭に替わり木蠟の生産も激減し葡萄ハゼの原木も枯死したものとされていました。しかし、平成29年にりら創造芸術高等学校の生徒達が原木と思われる木が生存していることを奇跡的に発見し、全国的ニュースにもなり、葡萄ハゼの栽培を復活しようとする取り組みの大きなきっかけにもなりました。

## ■日本のハゼノキ、木蠟産業の起源

日本には元来ヤマハゼが自生していましたが、実は小さく蠟分が少ないため木蠟は稀少なものであったとされます。

本格的な木蠟産業は、ハゼノキ（別名：リュウキュウハゼ）が1560年頃に薩摩藩（鹿児島県）に渡来した事に始まるとされています。ハゼノキの原産地は中国、インド、東南アジアとされ、別名にもあるように琉球地方を経由して日本に渡来したとする説が有力です。

## ■紀州の木蠟産業の普及の祖、田中善吉氏

本県の木蠟産業は、1736年に紀州藩から命を受けた有田市箕島出身の田中善吉氏が、薩摩藩（鹿児島県）からハゼノキの実を持ち帰ったのが始まりとされています。氏は稲作が難しい土地での農民を救済する換金作物として栽培を奨励し、木蠟産業を興すために私財を投じ、ハゼノキ栽培・精蠟技術の研究開発と県内各地への普及に一生を捧げたとされています。今から約300年も前のことですが、葡萄ハゼの発見も氏の普及があったからこそ

必然的に発見されたものと考えています。そして、その時代、時代に栽培技術、精蠟技術を研究改良し普及してきた先人達の努力により、今日でも最高品質の葡萄ハゼの木蠟として生き残っている。まさに研究と普及とが連携し、継承してきた証であると思えてなりません。

## ■葡萄ハゼ栽培と木蠟産業の復活へ向けて

木蠟が和蠟燭だけでなく化粧品材料としての需要も注目される中、新たに栽培を始める生産者が増え、多くの研究要望を頂き、特用林産部では接ぎ木技術や収穫しやすい低木仕立て技術の研究を始めています。

接ぎ木技術は、戦後に途絶えたとされていましたが、昨年度に有田川町の上野保二氏がその技術を唯一保持していることが判り、有田市の脇村氏の尽力により、なんとかその技術を受け継ぐことが出来ました。上野氏から伝授された秋に接ぐ「伝統的接木技法」を元に「春接ぎ」やより効率的な接ぎ木技術の開発に取り組んでいます。



図2 上野氏の接ぎ木

9月には林業試験場と普及行政（林業振興課・有田振興局）が共催する第1回「ブドウハゼ産業化情報交換会・接ぎ木研修会」を田中善吉氏の生誕の地、有田地域で開催を予定しています。



図3 当場の接ぎ木試験  
（春接ぎにより活着）

研究と普及の連携の真価が問われる研修会になると思われませんが、田中善吉氏や先人達の志を受け継ぎ、葡萄ハゼ栽培と木蠟産業の復活へ向けた第一歩となるよう研修会に臨みたいと思います。（特用林産部 坂口）